

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第28回 いずみ せん すけ
泉 仙 助

医学の道へ

泉仙助は、明治21(1888)年、茨城県行方郡潮来町潮来(現在の潮来市)に父柳之介、母いのの間に生まれた。

当時の潮来町は花街でにぎわっていたこともあり、一家は子どもの教育に良い環境を求め移住を決意。下埴生郡中郷村和田(現在の和田)にある親戚の吉岡家のつてで香取郡滑河町西大須賀(現在の新川)に居を構えた。西大須賀尋常小学校を卒業後、仙助は成田中学校(現在の成田高校)に通うため和田の吉岡家に移り、野球に明け暮れる毎日を送った。

中学を卒業後、医師を志し東京帝国大学(現在の東京大学)医学部に入学した。大正3(1914)年に大学を卒業すると、国内で初めて小児科を作った弘田長教授^{つかさ}に師事し、大学の付属病院で多くの患者を診察する傍ら、病気の研究に取り組んだ。

大正5年に東北帝国大学(現在の東北大学)医学部に赴任した後は、小児科学に関する知識を学ぶため、小児医療の進んだアメリカやヨーロッパへ2年間留学した。帰国後、医学博士の学位を取得し、同13年に旧制金沢医科大学(現在の金沢大学)に教授として赴任。着任時、北陸地方には小児医療専門の研究者が少なく、大学にも研究機器がほとんどないという状態であった。また、死亡者数の4割が子どもであった当時において、北



仙助が中学の時に住んでいた吉岡家

明治21年～昭和54年(1888～1979)

茨城県行方郡潮来町潮来に生まれる。成田中学校から東京帝国大学医学部に入学した。小児医療の研究者となり、教授として旧制金沢医科大学に赴任。疫癘やくる病の研究を行ったほか、娘の病気から「泉熱」を発見し、日本の医学界に大きく貢献した。



陸地方は特に子どもの病気が多く、仙助は小児科地方会を開催するなど、小児医療の質の向上に取り組んだ。

泉熱を発見

昭和2(1927)年、金沢市内を中心に原因不明の発熱性疾患が流行し、仙助の娘2人も発症したため、自ら診療に当たった。程なくして流行は収まったが、その後も仙助は研究に取り組み、新種の病気であるとして同4年に論文を発表した。しかし、感染源がネズミの排せつ物で汚染された食べ物であることまでは突き止めたが、原因の解明には至らなかった。

戦後、再び同じ症状の病気が全国的に流行すると、仙助の論文に注目が集まった。この病気は発見者である泉仙助の姓をとって「泉熱」と命名され、全国的に原因を解明するための研究が行われるようになった。仙助もこれまでの研究結果から、泉熱の原因がウイルスであると仮定し、それを証明するためにさまざまな研究を行ったが、ついに決定的な証拠を示すことはできなかった。

しかし、泉熱という新しい病気の発見により、日本の医学界に大きく貢献した仙助は、紫綬褒章、勲二等瑞宝章をはじめ、多くの表彰を受けた。そして昭和54年、92歳でその生涯を閉じた。泉熱の原因が解明されたのは、仙助が亡くなった8年後のことだった。

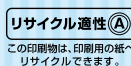
編集後記

日増しに涼しくなり、過ごしやすい季節になりました。この時季は、読書の秋、スポーツの秋などのほかに、食欲の秋とよくいわれます。皆さんは秋になると食欲が増すような気がしませんか。一説によると、体を動かすエネルギーの消費量は気温に関係し、暑い夏には減り、秋から冬にかけては増えるため、それを補うために食欲が増すそうです。私もエネルギー補給のために食欲旺盛になっていると勝手に思い込んで、食欲の秋を楽しみたいと思います。

令和元年10月15日号 No.1397

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。